

和州川面志

六

和書門類			
三六四八九	二一	六	冊
號	函	架	冊

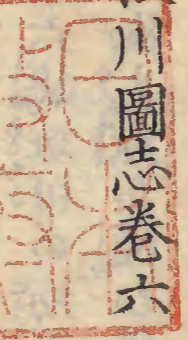
內閣文庫			
和書			
三六四八九	二一	六	冊
號	函	架	冊

內閣文庫	
番號	和 36489
冊數	6 (6)
函號	174 118





利根川圖志卷六



下總 布川 赤松宗且 義知 著

西一〇九一北端

香取浦 香取志云此の海西の方へ利根川は續き東へ銚子に至

る事十里餘北の方へ潮來み至りて一里餘乾の霞が浦に流

れて是より十里餘長鹿嶋息栖のりて三里かくのぶとて

大河たるを以て古より渡り難き浦とを故に香取の浦同

トく海又沖あはれ詠る古歌多くあり先海と詠るは万葉集

大丸 大船の香取の海は愠おろし如何ある人の物思はざら

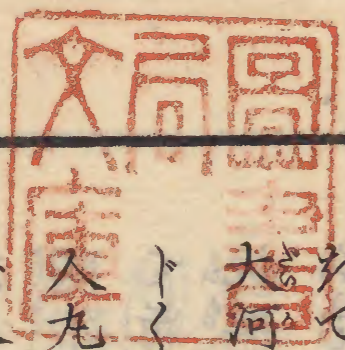
む又浦と詠るは續千載集に定家 夏衣香取の浦の假寐は浪

のよるく通ふ秋風まは沖と詠るは家集家隆 今日よりハ幣

帛取祭る船人の香取の沖は風向ふなり此外諸書も多しあり

十六嶋 本名新嶋といふ香取浦洋中もあり香取志云斯て數百

川北

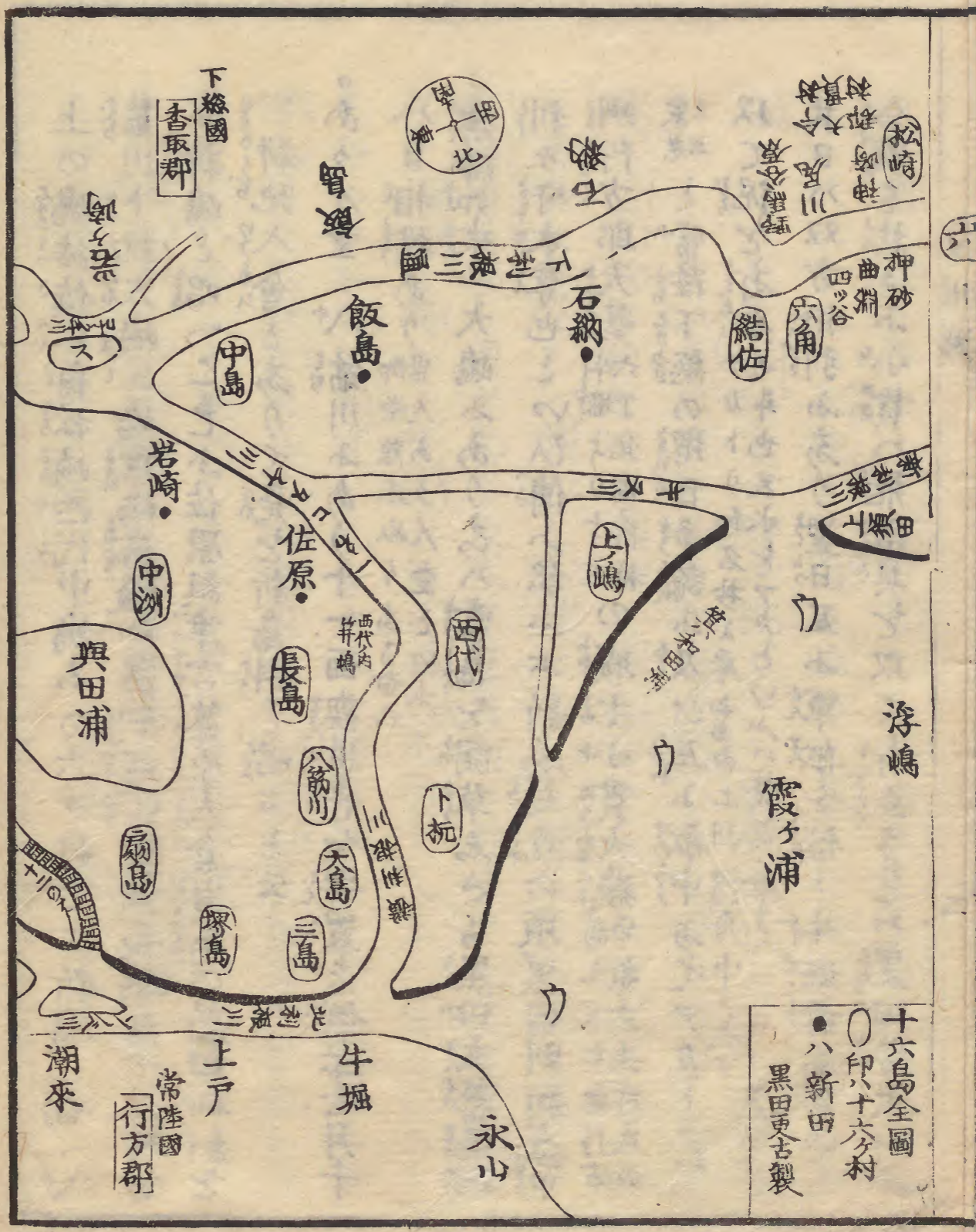


の星霜を經るまふく洋中み自うら洲出來年を積て稍大也
爰小天正十八年水陸田を開き始め上島まづ成就を石田主馬
亮といつる者吉田左太郎ふ就て 東照神君ふ言上を神君
にこゝめされ吾治國の始め新嶋を開くものと願ふ所あり平相
國清盛自己の功を以て兵庫の築島を立らる今家康が徳ふ回
て新島おのづから出來を喜悅の至りと仰らる八筋川西代ト
抗班田成就一同十九年大久保重兵衛ふ仰せて夫役を許さる
らる蠲符を賜つる慶長十年長嶋出來同十九年六角をむらる
元和三年石納飯嶋寛永元年大嶋を開き同三年嘉藤洲同五年
堀嶋同七年結佐同八年中洲同十五年磯山扇島ふれり然るに
天正十八年より寛永十五年ふ至るまで三代五十二年ありて
十六嶋班田の功成就をよきを新嶋といふ此島残らば 國初
の御先蹤ふ隨ひ後御兩代も同トく蠲符を賜つる云

上の嶋結佐六角松崎西代中嶋おの六ヶ村を上新嶋と唱へ八
筋川ト抗大嶋三嶋堀嶋扇嶋如藤洲磯山中洲長嶋此十ヶ村を
下新嶋と唱へとも小佐原組津宮篠原大倉岩崎の新田石余を
一耕地入會とありて是を新島料と唱ふと云

。あうん堂 八筋川ふあり十一面觀世音を安置を例年七月十
八日相撲あり 御堂惣赤ぬりある也

。藥師如來 大嶋ふありちの當島を開草とる黒田玄蕃亮則
利守本尊也といひ傳ふ諺ふ云新嶋起立の頃黒田則利と常
州行方郡大臺六丁堀内村の城主小貫大藏の領主佐竹氏の
家老と常陸下総の堺目争論ふ及び互ふ船中あてアカトリを
以て泥を打合之斗也又水をアカといふハ梵語あり 志が
其日ハ双方相引ふあり翌日互ふ軍船を催し牛堀前ふおいて
合戦を然る小貫ハ飛道具を以て打立々々ハ黒田勢大いふ



十六島全圖
 〇印十六ヶ村
 ●八新田
 黒田更古製

敗北してきて小急難のかまかしく覺りて黒田ハラの薬師如
 來を一信小祈念せし不思儀ある哉暴風頻お吹起り荒波歌
 船を顛倒を其際小黒田勢ハ霞ガ浦めらぎの鼻まで逃のび難
 あく引取らるとりや是をせむとろお合戦といふ後ハ公の御沙汰お任と也
 加藤洲十二の橋ハ川の両邊小民家ありて家おとの通行橋也
 中岸ハ橋有て中ハ板を架むもとより十二あるが時として十三ふ成夏河
 せバ又一橋闕るおと極めて出來るとあり
 子育觀世音加藤洲長泉院境内小ありおの寺より御夢相ひて
 小兒五疳驚風の藥を出をせふかとうず藥といふ
 牛堀 霞ガ浦入口あり霞ガ浦ハ至て渡り難き海を此所ハ
 滞船して風をまつ故小出入の船多く此河岸小集りま鹿嶋
 小至る小利根川より横利根小入り北利根川を経て浪逆の海
 にいぐる鹿島道記小仙臺霞の浦志田の浮嶋ふとい一るとこ

ろ船のうちより見とささるま右のりささるう小筑波山こ
 のも彼面の峯も見えさり漕行船の追手おれお見るがうち小
 むう山々も跡小ありて々小やあるさ詩小汲水疑山動揚帆
 覺岸行といつるもされがら目前の景氣おおひやらる海
 濱小海人の家居ありて前の杭小網をうけ不いそ磯邊小小舟引
 きて物さむとる住居のさほが小よく繪小も似かたりなりと船
 ちさむつらにえつきて見おこれも跡小成ぬ昼つら風を
 ちさるる岸小船をよせて風のうらるをまちるる小雨おど
 ろ小降ささりこれハ笛引お不いそ心もいとむづう一半時
 斗して雨風や名残の雲も晴ささりて空も見るがうちおさ
 よらう小日影の見えたる小岸の芦の葉小かき露ををら
 くと風の吹みおささ涼ささいやまさりぬ爰小船うけたる

ほしめてとり子やうれものとうむらさ人々おもをせしれとづ
うらもたなれめて時うつり侍ればやうく日もかこふれぬさ
らバとて漕出^{こい}行^ゆ小潮^{こしほ}來^このむらむふあとりて香取^{かとり}明神^{あきかみ}入海^{いりうみ}
をへごて神々しく志ありあむる木の間より玉垣^{たまがき}の見
え侍るいとさふとくをがまれさせ給^{たま}ふ海よりうちいる塩^{しほ}と
水とのみふとなきバ浪^{なみ}たうく船^{ふね}あづりあらはされども所^{ところ}の
もれども引船^{ひふね}多く出^でして細^こはあて先^{さき}ごち引^ひ々をバ日高^{ひたか}くか
もふ岸^{きし}ふ船^{ふね}着^つり來^こう祓^{はら}てハ暮^{くれ}て此磯^{このいそ}ふいつくべうりたり
と船^{ふね}のうち此者^{このもの}共^{とも}もいひあへり々きども今朝^{けさ}より此追手^{このおいて}の
風^{かぜ}ふさそハれ漕^ことも覺^{おぼ}えはそり行^ゆ々る也急^{いそ}申^{まを}刺^ささくる不
どうやとおや也船^{ふね}よりあがりておもふうさふ入侍^{いり侍}りなれば
あるトの出^であひてもてれいふ斗^とあし此宿^{このやど}のあるトハこれ
みちあまふうたもれなればこきて心^{こころ}ふうりあり参議^{さんぎ}源宗^{げんすけ}

堯^{こう}卿^{けい}水^{みづ}御使^{おんつかい}たまりくぐものふど送り給^{たま}ふ此君^{このきみ}も二日^{ふたひ}三日^{みっぴ}
のうち常陸^{ひさかた}に國^{くに}ふ下^{くだ}りなふべき沙汰^{さた}あり爰^{こゝ}もかの領^{りやう}しるふ
所^{ところ}あれバ何^{なに}くもと驛路^{えきじ}の人馬^{のひとば}おろく出^でして旅^{たび}の舎^やりれこや
まで御^ごらへはふうけ武藏^{むさし}野^のより先^{さき}ごちいしをらせ給^{たま}ふとせ
みうち此人^{このひと}々々こきくそれさごせり云^い
同安^{どうあん}永道^{えいどう}の記^きふ香取^{かとり}の浦^{のうら}ふ船^{ふね}よするも浪^{なみ}ハ志^{こころ}づうあれど風
むらひて船^{ふね}おそく日^ひも暮^{くれ}あんと船子^{ふねこ}どもいしきバゆうは遠^{とほ}
く見^みゆる森^{のもり}の木立^{のこたて}そのうことときこゆれを遙^{とほ}ふをがとぬうづ
きは浦^{のうら}あまの立^たちをうらなむ

音^ねふのこ聞^きてせごさる夏衣^{なつころも}かどりの浦^{のうら}ふよ次^{つぎ}る夕^{ゆふ}あま
銚子^{しやうし}といふ湊^{みなと}より入^いくふ船^{ふね}らも追手^{おいて}なれば此浦^{このうら}ふ着^つるうと
て帆柱^{ふなぢ}のをたててはあがる船^{ふね}あまし見^みゆる是^{こゝ}ふん香取^{かとり}の浦^{のうら}と
いふ

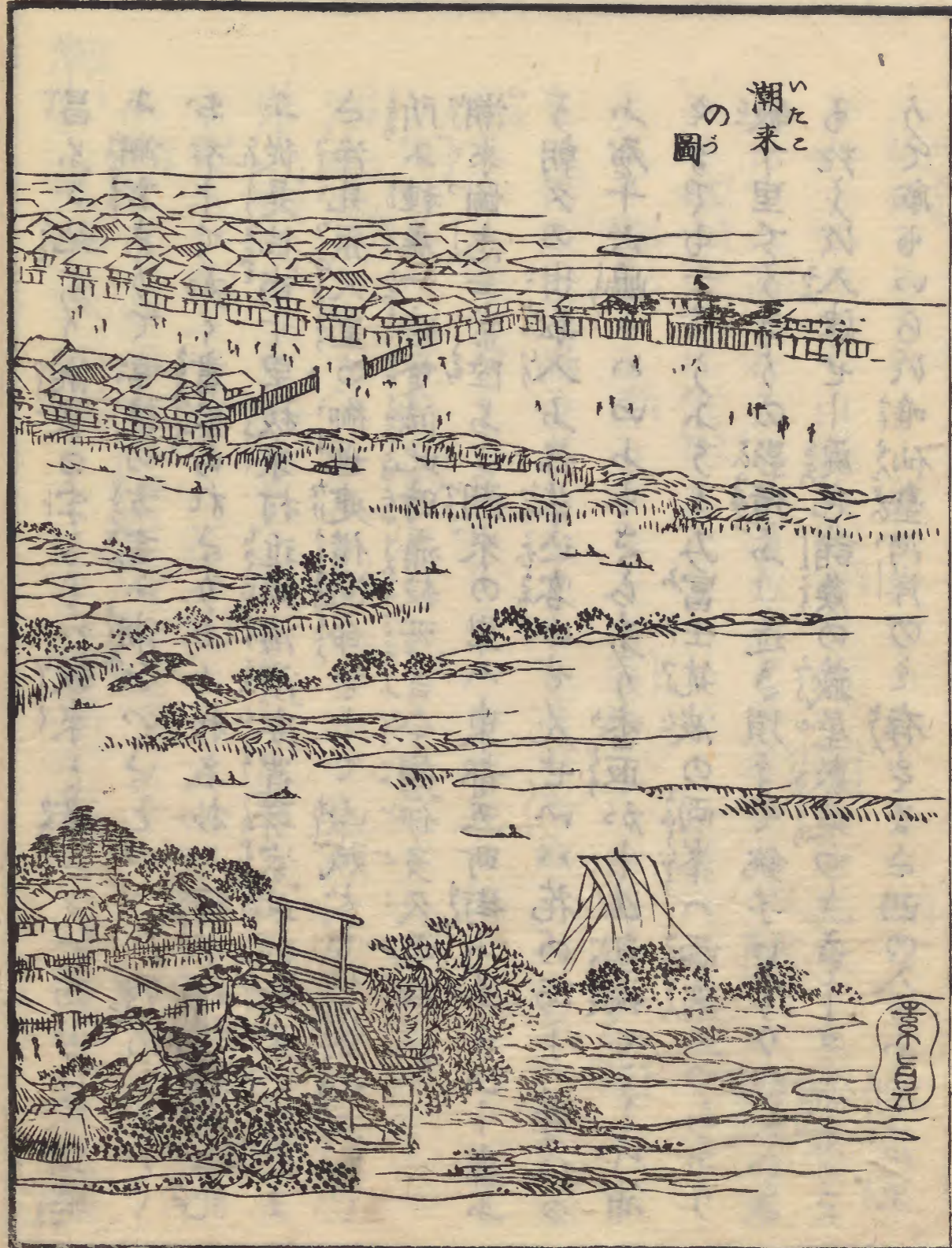
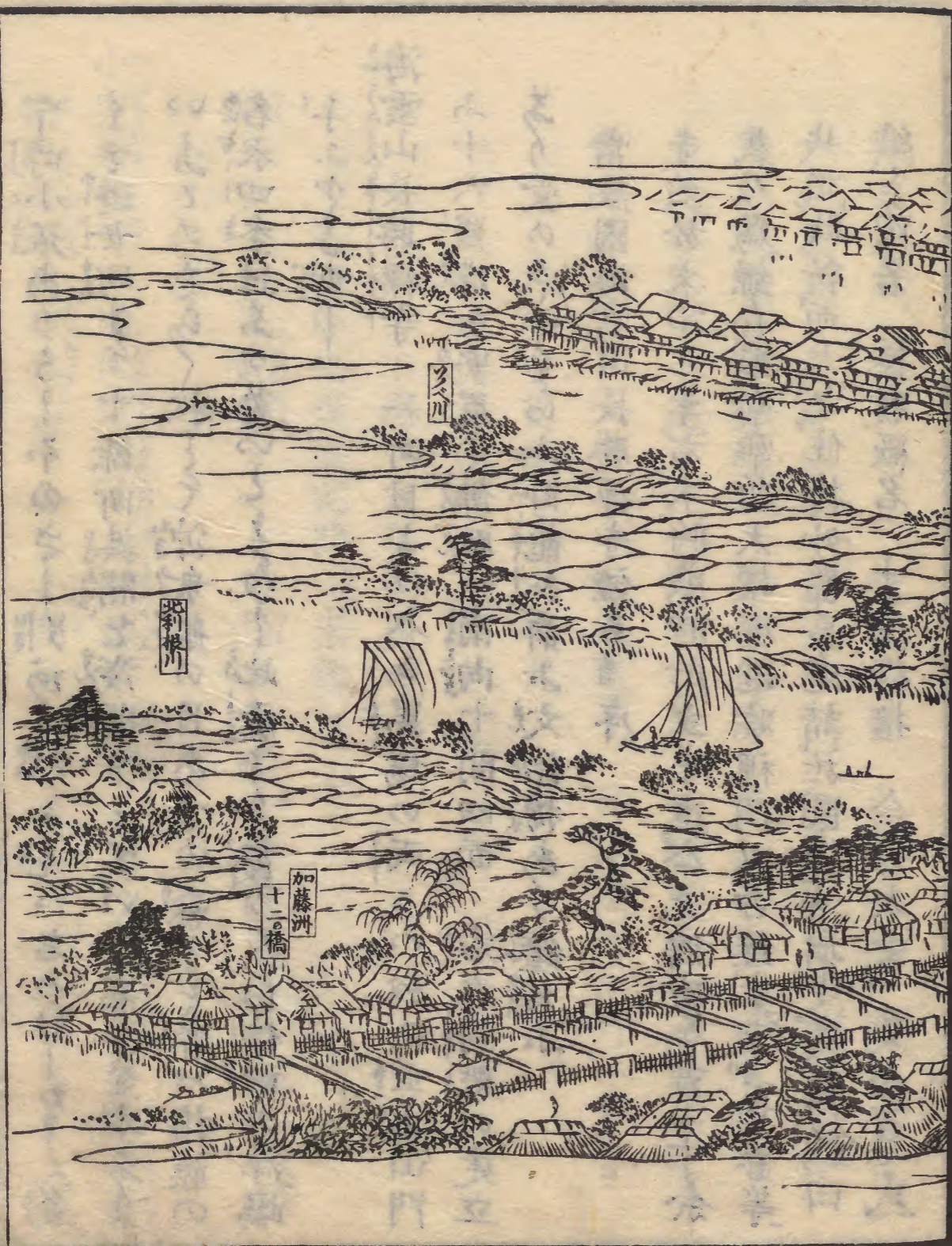
帆柱ぞみをほくしれる大船のかとりの浦の見るめから祢
どかくてゆり川岸の田面を越て霞の浦見ゆるもたるま
志ら浪の高く打よきる浦のあがめ折うら夕附日かやさあ
ひて船中葦一れ佳景あり

入日影色とる雲ふ立ちゆる霞れうらの水れ志ら浪
ま信田の浮嶋みどりまじりく浦のあれさふ木どち一まぢ
引こしそるやうふ見ゆるいふもえあらば

浦の名れうすとも夏ふとるとや見るめせどらぬ信田れ
浮嶋筑波山遠うら祢ども雲立ちめて見え日くれぬれ河
岸ふ螢のみごも飛あまこ見ゆるもまじりれゆら夜い
く更あむ事ふ心おちぬ祢バ歌よまべいそぎい潮來の河岸
ふ船をつらぬ歌あめとあまご一首づいを

潮來 鹿嶋志云鹿嶋よりハ西二里行方郡ふて濠肆有ていと繁

昌ある地あり潮來の字もとい板來と書くるを西山の君鹿嶋
ふ潮宮ありて常陸の方言ふ潮をいことい興あることく
おぼしてかく書改られりとう和名抄ふ行方郡板來風土記
ふ從是往南十里板來村近臨海濱安置驛家此謂板來之驛云ま
ふ淨見原天皇の御世建借間命をして凶賊どもを撃亡さる
所ふ種属一時焚滅此時痛殺所言今謂伊多久之郷云
潮來圖志云常陸ある潮來の里ハ東都五所街ふらひ一廓ふ
り朝夕の出船入ふ祢落込客のせんせいの花の河一た雪のゆ
ふ登十六嶋々いゆもさらあり香取か一は息栖てうこれ浦
々まで一まらふろみ富士筑波の両峯ハ西南ふつらあり
数十里てうまうの影境あり近き頃まで銚子口より親船をき
もれい入津せ一處也諸侯の藏屋敷建つゞき一が淵瀬うこ
りて船もいらは唯仙臺河岸のそ存さま西の入口ふ潮浪里



や呼小坂ありうーのさー引ゆる故ふ左ハ名つけーかゝん爰
そま遊女町ま々十餘町其間を淺間下とていや高き並木あり
いふこのむらゝ松とて沖兼船の目あての森とて春ハ梅藤の
名木四季にあが花いとよろゝ此處より霞がうら信田の浮嶋
手ふゆる如し

海雲山長勝禪寺 二町目より入る馬場の両うハ松の並木山門
ふ十六羅漢を安置を佛殿ハ南向十間四面 右大將殿の建立
あり堂のうこしらふ臥龍松前ハ文治梅あり鐘名ふ

常陸國海雲山長勝禪寺鐘名有序

寺始於文治元年右大將殿時所立也迨今元徳庚午百二十余
載乃爲鐘倉殿御願所大檀度道曉禪門以古鐘未宏貴眷等
共施財新而大之住持妙節長老請於圓覺清拙叟爲之銘曰
維古蘭若 長勝厥名 寸蓮微撞 今畧未宏 爰命鳧氏

銘範速成 鏗々旬々 殷雷吼鯨 音聞佛事 開聲啓育

大哉圓通 十虛廓清 霜天月曉 落景初更 真機普發

衆夢齊驚 深禪偃仰 苦趣休停 容船夜泊 常陸蘇城

上延睿箕 下息戈兵 檀門茂盛 梵刹堅貞 海雲日橫

青山崢嶸 人天號令 相道通亨 元徳庚午十月一日書

大工甲斐權守 助光

住持傳法沙門 妙節

大施主下總五郎禪門道曉

大檀那相模禪定門 崇鑑

斯あるしより此鐘とごりふ撞事をゆるさび又時の鐘ハ本坊
此入口ふあり

小里姫の塚 同大衆院淡島明神の地内ふあり小里姫ハ島崎左
衛門尉殿此姫君あり今ふ小里とつふ古跡の地名あり

潮來竹枝詞

詩佛老人

思似月明復水清
隨郎行處逐郎行
談從十二橋頭望
何水何橋無月明

泊碧欄舍

鵬齋老人

家々面水領秋色
明月湧時流更輝
漁唱一聲何處子
潮來風起竹枝辭

あさけの聲
あさけの聲
あさけの聲

あさけの聲

魚貫

鶴鶴や潮來をくへて岩つゝ

蓼太

南郭文集小潮來詞二十首
美序五山堂詩話其外詩歌發句と
諸書小散見する處擧て數へがまゝ畧之

松屋外集二神社を古曾と
りし條小伊太祈曾ハ和名抄小紀伊國名草郡伊太祈曾神戶須佐神戶並ひあり且來郷時前神戶須佐神戶並ひあり常陸鹿島小潮宮とつゝる小祠あり又行方郡板來郷也

今ハ潮來と書りこハ朝來の誤あらむと門人北條時鄰が鹿島志小いへり續日本記四の卷小紀伊國名草郡且來郷と有り

名物 花あや丸 川名び

川名び

鯉

むく鯉鳥

扇島

田植のぬ

五達

潮來曲の唄

柳よやあざよ直あるをぬぎいやふ風もあびうんせ

ささけの三夜の三日月さほよ宵ふちらりと見むうり

こしが心が竹ふもはくバとつて見せとやあのみねを

さぬよかほふ神あさるらば何をせたまへや今一度

いたこ出づぬの十二のそゝを行つもどらつ志あん橋

戀おこがれてあゝせとよりもあうぬ螢が身をこがけ

心こ出島のすこもの中おほや免咲とらつ也あつとぞ

戀のちとぶと草ふひうも福をみとるよふ猫ほりや

數あれども余はもく下ぬ

潮來の遊女何某ある時の吟

おもふ事積でいづす炭火の如 俳家奇人談

露もやとろく寐らぬ舟の中 霞水

潮來詞二十首 庚午南郭文集三編 二才

甲子春遊鹿島舟下刀禰行聽歎乃聲調楚哀頗有情致問之則云潮來所歌潮來常南地名也既自鹿島歸舟登其地就見臨江數百家多倡妓俗雜日夜相聚遊戲蓋東控海西通都率多水漕之利魚監之饒商旅所湊亦江東一都會也其謠大類異歌當讀樂府遺篇吳聲歌曲及西曲諸樂想見六朝謠俗之態其聲雖不知以今視之士風詞情蓋可知也又感劉禹錫聽竹枝之音乃雜擬江南諸樂符此作此詞于首因記舟行興寄聊自

不見東流水歸舟西曲流潮來風且逆有時不自由 可憐洲裏鳥兩々浮江永日見不識名指顧問客子 門前倚獨樹鬱々掩江涯為是苦心多春來不著花

雲氣南馳曉日紅只將

一雨洗晴色不須遠

駕毛之如雲穩坐長江

萬里風

曉笛乃稱川水雲老人球



園邊川 潮來の前北川をいふ北利根川の分流あて末の延方よ
て浪逆の浦に落つ此川の名にむくくこの大和屋太兵衛
抱の縫女せの朝夕びん水を流くる故そのべ川と云とある
あまづ川 北利根川の末ふあり是より浪逆浦へつづ

髭石どの芦戦ざくり鯨川 貞翁

浪逆海 鹿嶋志云大船津の前より行方のめぐりをかけて云り
萬葉集に 常陸あるなさく北海の王藻こそひけだこえされ
あどく絶せん仙覺抄に常陸の鹿嶋の崎と下總の海上とのあ
いひより遠く入る海あり末に二流あり風土記にふいふをせ
流海とかけり今の人々の内の海とある申すその海一流は北の
く鹿嶋郡南のく行方郡との中ふ入をり一流は北のく
行方郡と下總國の堺をつく信田郡茨城郡中をわたり然るふ
う北内の海塩れつる時あは波ことふさうのなるるるれは

浪のさうのぼる義ふりて浪逆海といふべきありきり云風
土記に香嶋郡に西流海ま行方郡東南并流海云
安永鹿嶋道の記に今日もまづ船路もくまづ漕出まば潮昨日
あは似む廣き堀江の芦間もく不どもとをく一真ありりりい
つう岸くく遙ふ漕出れば入海とやらんいへもど蒼海うだ
りあられむうあると志風との山も磯にも不ど遠らもどらあは
浪風あざこくりていと静るれば取楫ゆるく心也とき一十あ
まり北嶋ぐあふかきるとも及ぐく見也息栖はてるうふ沖
のうさき出さるいふもさらあり
立花く松の洲さたふそれとまついそでもあるく見ゆる
神垣六の御社ふも昨日詣むとの武藏の國府ふていそ北あら
まあり一々此頃の風ふて船路追手あらば打やとぬ今日ら
よくえきて船路も静るをば船よせむと船子どもいへもど兼

てそれまうけあら祓にたうれとりまうあひの出がごとく行

過ぬるどあく大船津ふ差ぬ此き一ぬと十八丁むりり放せて

海中ふ鳥居をてりといふ今建替の時ありとて見えん云

大船津 鹿嶋の神此一の鳥居海中ふたり鹿嶋日記ふ舟津と

いふ是大安寺に私帳ふ津國西成郡船津とみえ平家物語有

王嶋くごりれ段ふ被嶋へてくる船津ともありて船はく野ふ

いふ名ありりり云ふまも神の津ふればむういハ津の宮とい

ひいよー風土記ふ見ゆ是より神宮へ十八丁

まご大船戸と見つー東國戦記鹿島合戦の條ふ文畧江戸崎

の城主土岐伊豫守五千余騎を引卒一船二百艘ふ打乗り順

風ふ帆をあげか一ぬをさして押寄るこの事一聞へけ

色バか一ぬの棟梁平自官友治大ふあどろき合戦の手分を定

鹿嶋の故城 鹿島志ふ鹿島三郎政幹の子六郎宗幹始て築處也

宗幹ハ讚州屋嶋合戦の時義經の先手ふて討死其子時幹城

主とふれり時幹より十二代の孫治時天正年中佐竹氏のとめ

ふ殺されて城廢をかく鹿嶋氏滅亡一ふより國分大膳次男左

衛門胤光治時の外族ありて惣大行事とせり是古一への

惣追神使の家あり今猶存を委曲ふハ常陸國誌源平盛衰記東

鑑鹿嶋氏世系等あり鹿嶋城合戦のことハ鹿嶋治乱記東國戦

記ふとふと今ふ城山とて其跡あり慶安五年までハから堀

ふとあまご残て有一を泰平の御せふ用ふきこととて大宮

司則廣うけう堀ふと埋らまき 新坂新町ふと云ハ 又大船津

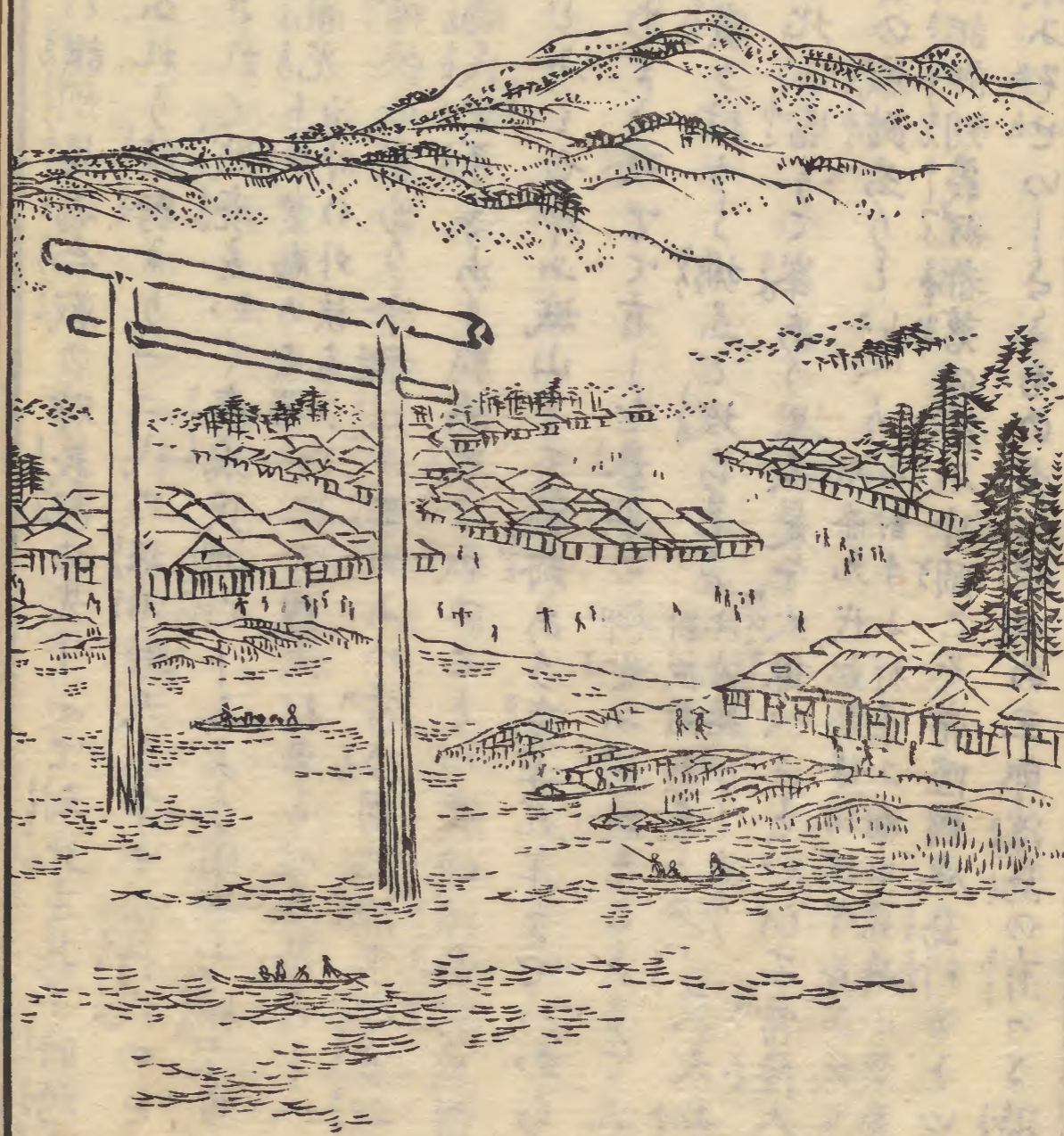
より北ふ當りて峯あり里人是を大椽べとといひて常陸大椽

國香の城跡ありといへり 北條九代記北條相模守義ふ從て真

義經記評判義經都落の条ふ片岡こそ常陸國鹿島行方といふ

荒磯ふとせいーるものふを信太の三郎浮島の有る時ふ

鹿嶋故城



鹿嶋神宮
一の鳥居
大船津
の圖

大船津



素真

常ふゆきて遊びくる小源平の乱出來候りて葦の葉を舟ふり
ありとも異朝へも渡りなむととんトれる

鹿嶋大神宮

常陸國鹿嶋郡鹿嶋郷正殿武甕槌神相殿神右ハ經

津主命左ハ天兒屋根命を祭り神代の昔より六の所鎮座

大神あていともくふる祀事あり風土記淡海大津朝天皇

初遣使人造神之宮自爾已來修理不絶云とあるせり猶委

き夏と鹿嶋志不詳ふせハ畧に

萬葉集ふ

霰降鹿嶋女神を祈は皇軍ふ我ハさふを

○攝社末社をべて八十末社あり畧之

○祭禮ハ年中の例祭大神事百三十三度小神事七百餘度その内

常陸帶の祭四月十日祭頭二月十五日御田植祭五月御軍祭七月御

船祭七月十日新嘗祭八月初日相撲九月九日夜

○名所

要石地上ふ出たる所二尺許石頭ふ夫木集ふ光俊たづ

糸うねりふつる哉千早振と山のおくれ石のみまどを

御笠山神宮のめぐりの山をいふ松杉の御手洗川二丁むり

高間の原東一里斗り末無川同所碁石濱同所鹿島浦東大角折

濱三里斗壙山神の池三里斗浪逆海大舟津

○御物忌身潔齋して神仕奉る祀事あり物忌ハ神官の内よ

其職と

○大宮司神宮寺の支鹿嶋志不詳あり

○神寶古文書等畧を

○七不思議 要石 御手洗の水 末無川 御藤

海の音 根あが松 松北著

○七井戸 深井 成井 華柄井 清水井 保太井

寸府井 波左間井

。名物 洲濱の菓子 俚俗デニユウといふ
 弥勒謠 土俗のあらひふ物の祝ふどあるをり又ハ祈事を日
 あどきべて時節ふはあつゝ老婆等おろく集り弥勒謠とて各
 声をあげて歌うとひ大封をうちて踊り手を振つゝ踊る貌
 いと可咲く中昔の風と見えたり其謠ふいとくよのあうりま
 んど却未川だいそろくのふ祿がついといふと伊勢いせとか
 日中 鹿嶋 御社 尊
 か祿志やとん打か輝後ろありろありろやい息洲御社りりこ
 女祿男祿 御坐舟 香取 四十 御社 音 開
 へめか免をかめこざゆかとり志トふちやろおとにき
 くもたふとやひととびのまねりまうしてか祿のさかふまか
 うよう金三合及 およひござぬよねのさがあまううよな何
 事 成就 常陸 鹿嶋 神
 こともかある一ひとちかしまのうみとく又雲萍雜誌おも
 鹿嶋踊の謠見ゆ此外くきくの謠あり

經石 御笠山のうち埋る所ありて五六間許のあひど小石
 小經文を書るがまどもり親鸞上人此筆也といひ傳されど
 總常日記 臣小近き頃が友持谷望之があふまうてとる
 あり出さる銅牌一枚を見せバ秀尊といへる法師の書て埋め
 たるあて親鸞上人のふたあふぬあとある一

表
 鹿嶋太神宮寺
 奉納妙法蓮華經二字石書寫 一百三十七部
 嘉吉三年庚申二月二十日 大願主秀尊白敬
 長九寸二分
 幅上三寸三分 下二寸六分強
 厚一分弱

裏
 赤菟 醫山 道永 次郎三郎
 慈父祐尊 良貞 德賢 妙意
 慈母有阿弥 道祐
 嘉吉後花園亭 年号 拒文化十二 年三百七十三年

今もやろふをさ免あり云



五高港写

十六



鹿島
神宮の圖

六

享保道の記仙臺吉それより興ふのりてゆく浪打際まで大船大
宮司同神司東主膳出あひてあり此に立て主膳ハあふひ
き所ところの古跡ふどかよりきうに威徳院觀照院寶照院地福院ふ
といふ真言宗の寺あり大船津の漆家數千斗ありといふ此里
をえぬきて山のかさふ石あてりけさる小橋ありこれ鹿嶋明
神の御神領地ありふのところに藤原郷といふ大織冠鎌足
公此御誕生の地あるもへうくつへり則社もありといふ
つづり大織冠ハ大和國高市郡の人と元亨釋書ふハ見え
り此遠國あて生れ給ひいと云こと成きうば詞林採葉抄ハ鹿
嶋明神ハ參詣一ふといふ事見へたりそれさへいちある
からびさやうの事よりいひ出して後人の伝へたるふや鎌
足公此もちたまへふ鎌も此社ふあるよをかくる猶信トが
た一近衛殿御家ふはとよりいふよを聞かまふ鎌倉ふ

かの鎌を埋まふといふ説もあり何あこれと數あるべき
も此ともおぼへばいひきう本説ありむ瑞甕山根本禪寺とい
ふ寺あり門の額ハ東海禪窟とあり筆ハ志らざれどもふるく
ゆへいりて見ゆ本尊ハ藥師如來推古天皇の勅筆ふて佛殿ふ
祈禱とあそびされふ額あり何まくだり此御甕とて齋の家
ふ今ハ傳甕ありといふ藤原光俊の鹿島を見れば玉ざれれ小
うめ斗むらぞまこのとりきるとよとありハ此うめの事とぞ云
まよ安永道の記徹山ふむう一此道を祖父君のこころせあふ
道の記ふくといふれはかくを彼主膳ハ宿ふ至りて浴を清め
衣服ふどとりやうのへてまうでぬまづ跡の宮ふまいるまよ
りて御齋ふまいる女四五人あつびぬさる中ふおとまひき
る女立出て御酒をくめまよ御齋をくらる一和歌二くさ
もてく主膳うといふ居て通せよと聞ゆれども神廬のお

それともあまのつとみおひらへせん事ことのたゞりありあうく帰國きこく
此後このちふこそ申まをべきよしあてまうてぬ御齋みいの歌うた二くさ有ありる

わふみ守護しゆごのところみちれくの太守鹿嶋たうしよの社やしろへ
立たより給たまふかゝこさふ神かみ盧ろ比ひ程ほどをおゝえうら
い祝いのちの余あまりふ言ことの葉はをばくりあてまつる

鹿嶋祭主御齋光子かしまいしゆみみいさひこ

うれしやと神かみもあもつむ今日けふのまごまれある人のあふく
まごとを

又寄國祝またきこくをよみ侍まをる

かゝこゝれ猶なほゆるきあゆまびくらゝおさする國くにに御代みよの
民たみくさ

と仰おほりなれば日を經へて返かへしてとて申遣まをしらす

鹿嶋の御社かしまのみやしろに詣まをる日ひ御齋光子みいさひこれ由よしとよりう

せーやと神かみもおもつん今日けふのまごまれある人の

あふくまごとをとかいほけて送まをらるれえ

外あふまご何なんうおもはんまごふきていのるまごを神かみしう
けあハ

寄國祝きこくといふ事をよみて送まをらる返かへしてとて

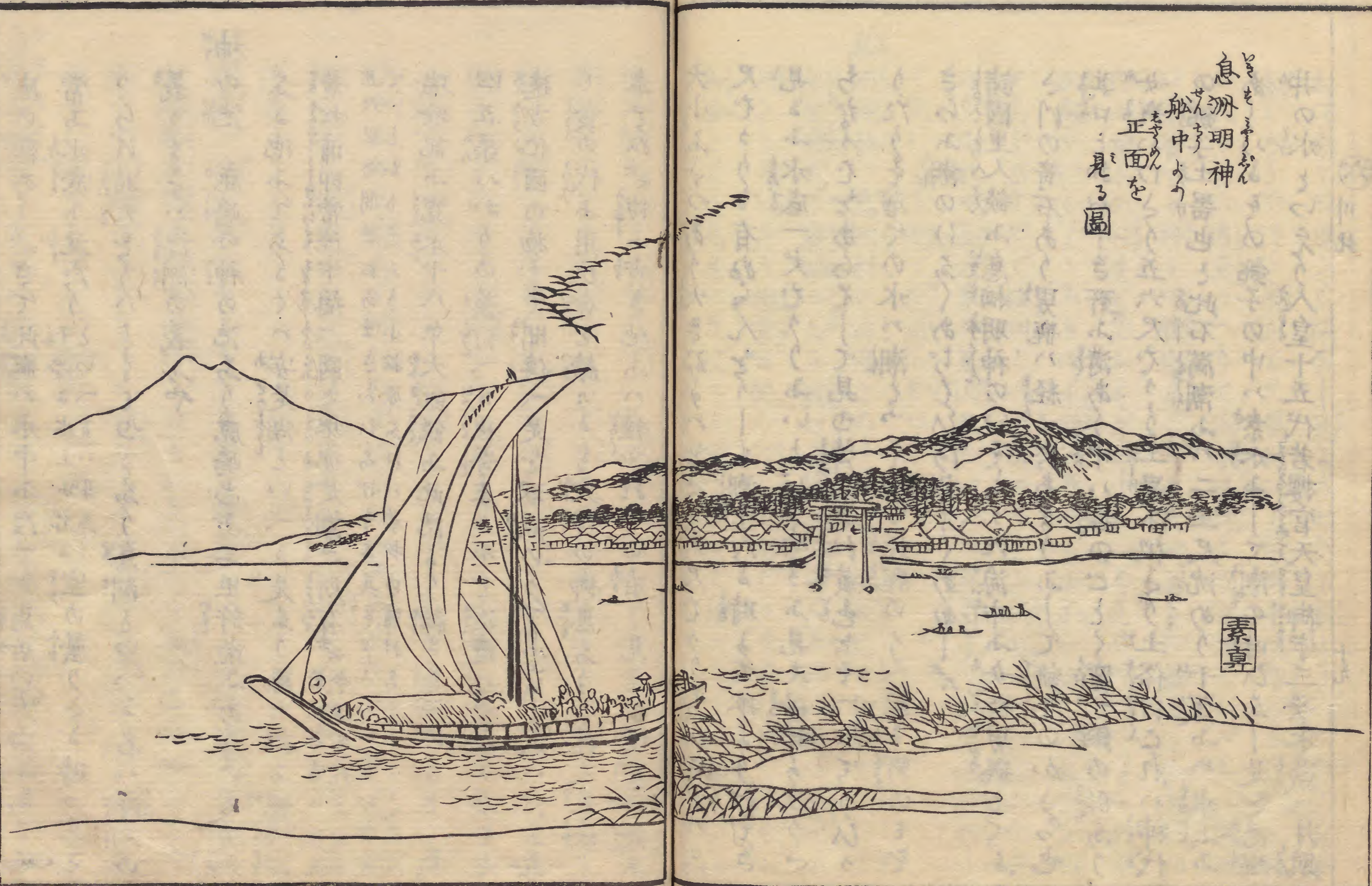
代々たりけて治ちる國くにに民たみくさもことむの露つゆも猶なほあびくらゝ
かくて十所じゆしよあまもろむ木き立たはぐく所ところを行おきて鹿嶋かしまの御本みほん
社やしろに參まを詣まをるふまご森もりの志こころをりたるが中なかふじきて杉
比木ひき高たかさき何なんとなく神かみさびにぞ敷しとらとさいをむうとあ
し樓門ろうもんふへ大宮司おほみやうし何なんがしをはしめ神主かみぬしあまご出迎いでむかへあふい
を拜殿らいでん歌仙かせんの間まあといふきらめりごころぎふさうともとあ
がゆ石いしの間まより内陳うちぢんふ入いるあおがみ奉ほうり公こうごころし此これ福ふくきお
とまればみてくらいつくうせみきを進まるふといとくさう

ちづまりて思ふくはちし是より七八丁歩より行て奥の宮ふ
参りまうでけく爰みて又旅粧ひして御手洗要石など行て見
る又もとの道立ヶへりて御本社残るうとなくかみぬ数多
比靈寶をも拜して後宮めぐりまればあるに鎧あり御本社の
内ふ神木の杉まことふまぎぬくいくとせう経くるものぎ
木高くつとくふらの主膳こまやうふかたる二の鳥居を出
てあり百よせて猿田といふ驛のうとふ行日もたけて午のさ
がりあれは高天原三笠山などいひ見むして汲上ふ昼餉一
て夜いとう更て夏海ふ差ぬ云

息洲神社 息洲村の海邊ふあり 住吉三神底筒男中筒男表筒男
命を祭り鹿嶋日記ふ處のさは駿河のくふれ三穂の社頭ふ
似たりといえり總常日記ふ汀三十間をうりおぬきて海中ふ
鳥居とてり鳥居のきは二三間はれきて神代より比瓶といふ

大小ふつあり大きぬものいそり六尺むくりちひさきハ三
尺むくりも有ぬらんをりも潮干たる時よて船よりれぞき
見ふ水底一丈むくりふいとほざやうふ見え砂地ううう
ちなるむをあらそして見ゆ薄黒きに黄色をそつてりひ
りたりを産ての水ハ潮をうくして此瓶のうへれる所のとぞ
さらふ潮のけあくあぢをい阿そくあぢ云
諸國里人談ふ息栖明神のいそちうに海中ふ女瓶男瓶とてふ
この奇石あり男瓶ハ經一丈あまりふして銚子のかさら也
其口とおがしき所ハ溝あり中ハ控のごとく窪て鏝の形あり
女瓶ハ口より五六尺むくり土罫ふ似たり土俗曰これハ神代
の銚子土罫也と此石満潮ハ二三尺沈めり干浮ハ水上ふ
あつるその銚子の中ハ素水ありて潮の味ハあし是を忍塩
井の水といえり人皇十五代若櫻宮天皇御宇三癸未歳二月鎮

息羽明神
船中より
正面を
見る圖



素真

川北

二十

座の額あり云々此繩ハ水中ふたてる鳥居の左右ふありて
常ふ水底ふ沈たり下深ハ水上に出る空の曇りたる時ハ見え
うらび晴天をりハよくとるあり息洲といへる名ハ沖洲の
義うまうハ浮洲の義也

神の池 鹿嶋の神の池あり鹿嶋志ふ三里許南ふありいと廣大
ある池みてふるくハ安是湖といへる是あり風土記ハ鹿嶋郡
若松浦即常陸下總二國之堺安是湖之所有若松の浦ハ此邊
今深芝村と云て
五六里の間若松あまとおひえり各其まぐふおもむき有
ていとおもふるき小松原ふれバ若松の浦れ名もいふくふん
瑞驗記ハ寛永十八年大飢饉ハ此池より細き鳥繩のごとく長
四五柔ばかりの藻汀ハ日夜寄來る不ど近邊ハいふ及む
遠方他國の物まで聞傳へ是を取飯のうくふなり或ハ汁ふ煮
て食の代ふ用ひ命を續くも大神の御惠ありと諸人尊敬
奉りぬ云梅ふ古き池ハ種々此もの有と見えて閑寛瑣談ハ

結駝録を引て元文二丁己年播州姫路の一邑ハ池あり廣さ數
百歩あり或人ハ小兒其池ハ水浴て溺れ死しけむハ水を
涸して田とせんとして一村の人々合力て水を酌乾せし池の
底ハ白き綿あり土人こまを取て着るハ草綿ハ等しけむハ糸
ハ縹せ織木綿とさるふ結好ある着用とさるハ尤多く有ハ故
村中ハ用ひ餘りて他村へ賣出しけるハ色白く上品なむハ他
郷の人ハ價を惜まば争ひ求けるゆへ一村大ハハ利を得て徳
はきとりとせ

新野橋 神の池の石とりをまぐて輕野といふ風土記ハ萬葉集ハ
鹿嶋郡新野橋別大伴郷とことかきなる長歌ハ輕野より舟
出して下總海上をさして渡るハを讀てささむそハ邊りふ
ありハ橋ありけん云橋今ハ古の

童子女松原 官本水雲云風土記ハ輕野今神の池也以南童子女

松原昔一神の男神の少女と云るがありて少女を海上安是の少女といひ男を那賀寒田の郎子ともいひ一が何をも美麗ある生れつきよて互ふ思ひ逢て遂ふ契りを結び一が人目を愧て二樹の松ふ化せし事をのん是今の常陸原地ふ河を鹿嶋の攝社とて古く祭で来る手子后明神ハ神の少女を祭る一あるべし古ハ常陸原の地下總海上郡ふ屬せし由も風土記ふ見ゆき此乙女をも海上といひ一あり安是の地名も風土記ふ出たり寒田ハ今三田といふ此邊皆いふ一那阿郡の地ふて神龜以前ふ鹿嶋郡といふあり也

手子崎明神 東下の羽崎村ふあり鹿嶋志ふ旧記ふハ神遊社ともいへるよ一えてつハ大神の御女の神也といひ傳へたり按ふ上つ代香嶋郡童女松原ふ則羽崎神の郎子神の嬢子と云ありてかときふむつびとつりなるが逐ふ松樹と化して奈美松

古津松といへる故事風土記不見ゆされハ古の童女を祭る社ありあらざる嬢子を手子といふハ女子を愛しといへる名ふて万葉ふ葛飾の真間此手兒まと植科の石井の手兒まとささりの手兒ふいゆきあひあどよめる手兒もあふりさて手子崎ハ此とつり海の出崎あれを手兒の住る由もてさるいへるあふん云

羽崎 東下の羽崎村あり此邊をてて羽崎舎利高野別所海老臺本郷アラ久島の七箇村を合せて東下といふさて此ところハ鹿嶋の浦より浅きいと廣き砂山の木草もあふ赤々と志さる砂地を経てあふ小至るの光俊朝臣の家集ふ康元元年十一月鹿嶋の社ふあふりて彼嶋の海を渡りて見ゆ我國此東のそてふあふりて社あり崎をてて七里とぞ申めると云り一ハ古の羽崎のことありてぞいふとある

○是より川南

側高明神 香取郡大倉村山の頂あり古松繁りて神々々き森

多香取第一の榎社ありとぞ祭神古くあり秘して云ざり

一とある鹿嶋日記に側高明神といふあり年ごと小鬘撫の祭

といふことありその酒宴の席を設て賢酒をくみかたしも一

口はあつりの鬘あり者あをを考ひて三杯のまきなるら

栗飯原氏城跡 分郷村ふあり今城山といふ土手堀の跡ま大

ある石櫃あり 小見川より西南の城も小見川ととあり

一あや常總軍記に小見川の城あり栗飯原左衛門小見川越前

守と見えたり

木内大明神 木内村ふあり諸國圭齋録下總國の部ふ七石木内

大明神香取郡木内郷 木内伯耆同五石熊野権現 香取郡府馬村

宇井左門あり見えたり

小見川 香取郡あり内田彦の陳宮あり諸州採藥記云小見川内

田何某領内ふ四季咲の櫻二ヶ所あり一本ハ八重ふて一本ハ

一重ありと見ゆ 此さくら 杉檜して今ハあり 天正十八庚寅年

領地拜領下總國香取郡小見川 八千石松平 監物家次

東源軍鑑三藤澤合戦の條ふ云小田天菴ノ旗下ナル小見河越

前守輝賢ハ小櫻威ノ鎧ニ三枚申ヲ着テ河原毛ノ馬ノ乗

爰ニ梶原美濃守景國カ家子梶原平左衛門トイフ者心ニ思フ

様彼六人ノ者ハ近付テ討タムト叶フベカラズ然レ氏彼等ハ

武勇ニ高慢シテ動モスレバ諸軍勢ヨリ先へ進ニ出ツル匹夫

ノ勇者トハコノ人々ナリ何トゾ一人モ二人モ射殺サムト思

ヒ唯一人攔ノ木ノ蔭ヨリ子ラヒヨリ既ニ二十間ニハスギザ

リケリ平左衛門矢頃ハヨシト悦ビ思フ様ニ引諾兵ト放ツ其

矢アヤマタズ小美河越前守カノドブエニ葛巻攻テ手破ト立
ツ急所ナレバ越前守馬ヨリドウト落タリケリ云此六人ト云
由良判官則繩戸崎大膳亮長俊行方まと附録あり小田天菴氏
形部少輔貞久海上主馬五郎武經也
治公旗下ノ城々小美河ノ城主小美河越中守と云也
黒部川 同郡府馬志高稻荷入の村々より流を出づ是を黒部川
といふ黒部の橋あり此橋より下を九十九曲川といふ屈曲凡
二里許を出る小見川を経て利根川入る
七本木 小見村の富光山徳聖寺庭中ある銀杏の木をいふ此
本周りニ丈をありまを寄生六本ありそハ 樟 松 楓
南天 竹 ウシコロシ 是あり銀杏といふ七本を依て
名をくといふ
清水観音 清水村あり清水寺といふ十一面観音を安置せ世
人を禁食して小兒の病を祈る参詣駈一

又顔観世音 五郷内村樹林寺あり河り靈験あらとる観世音也
門外あり高き石坂あり此石坂を逆きふ向つて這下ると河の小兒
の病を除くといふ宿願ありて参詣する人の皆さうさふ這
おりるありまの寺もと壽林寺と書しや常總軍記に
此所ハ千葉の軍大將東六郎鎮胤が領地あり六郎幼少の時よ
りまの壽林寺あり手跡學文も習ひ師弟のよりと有る上地
頭あり菩提寺ありいとうとならざる寺あり一つの寺あり
折々ありて他事あり申かとるとるとると見えとる
四季咲の櫻 庭中あり周り五尺許石の玉垣をめぐらを花一
重ありむらし小見川あり有し櫻の種ありとる或人のいつり
千代が谷 本堂の後の山に至りて西北を望めバいとる廣々とる
耕地ありまの邊を一圓あり千丈がやつとりふ又千葉の族の
住しりるふを千葉が谷とも云といつり東六郎が城跡あり

平山と云所みで笹川臺ふ大門の跡あり
名物笹川規とて此邊石出今泉のあより追多く出づ

椿の海 今干泻八万石といふは是より香取志云神宮を相距夏

六里許香取逆瑤海上三郡の交ふ接を周廻十里餘此湖水今ハ

消歇して田園とふより古老傳て言大古此所ハ最大なる椿樹

あり高さ數百丈枝葉三里の間ハ杖疏一華咲時ハ天紅ありて

散時ハ地ハ錦を敷りと疑ハる吾大神は祓ハ影向 此水

壽盡て根と共に自ら倒る根の跡湖水とある曰て是を椿の海

といふ上枝の方を上總といひ下枝の方を下總といふ畧此湖

水の備ハ椿村と云るあり椿海ハ曰て然跡せり又湖水より逆

瑤郡矢挿浦ハ到る夏三里許然るハ寛文中人有て官ハ達ハ大

命を奉て地を堀湖水を矢挿の浦ハ流ハ水陸田數千町を獲る

了斯人民移住て十八村とふれり各共ハ椿新田某の村と稱せ

世俗干泻といふ是より田海の變時有て湖水變りて民屋田園

とふより然と今大宮司家毎年二月初子丑の日椿海の祭あり

是則古ハ此湖水神宮の池ありハ時の遺則あり云

石出 此所ハ利根川へあり出るところふて常陸原の砂山と

相對ハ風景至てふ所ハ千葉の氏族石出日向守胤朝

鹿嶋日記ハ云流れのまゝにくぐれば光俊の朝臣の霜ふくれ

たるなどよほまハ萩原此さとゆととる方よみゆその東ハ隣

なる日川といふ里ハ沙山とて草木あるもなく砂のま立の不

なる高山あり右のうさハ志もつあきの國ハ香取海上のふさ

つの郡はどきたり海上といふハ山上の憶良の臣の鎮懐石の

歌の巻五 にはこれとれきつ深江のうなうみの子負ハ原と

よえをねりハ海のそとよりあるより此名ありり此日こ

アハ河のひろき坂東道七里ハもほありぬベハ云

湖城
喜一
寫

石出より
常陸の
砂山を
見る



二十六

砂山



岩井不動 岩井村ふあり二王門本堂鐘樓堂いとをどそろあり
山の上より清水落る瀧口數ろ所有りありと云 堂の後の方ふ
大瀧何り病人死生の願此所ふ垢離して護摩をこく死病ハ物
を忘るといふ

下閤ふか巴うぬ關伽の帶うぬ

蓼太

奥の院不動明王ハ春日の作といふ同岩屋二丁むりり通りぬ
け瀧あり左右ふ三十三所の觀音有り大師遊歴の地と云

猿田大権現

猿田村ふあり諸國圭齋録下總國神社部ふ三十石

猿田権現 海上郡猿田郷

石毛伊織ともゆ又新義真言部ふ十石

海上郡舟木郷

東光寺ふと見えたり

高田川對陳

常總軍記ふ云畧斯て常州圍見の長臣栗林下總守

義長の印西松夷臺より此處へ陳をうつり

利根川を背ふあて

て高田川の岸ふ陳一惣勢合て五千餘騎旗ざり物を風ふ靡

陸伍整々と備はりまゝ千葉方ふの東六郎鎮瀧を大將として
三千餘騎次將あり二条大藏五百餘騎鳥居筑後五百餘騎村田
兵衛五百餘騎千葉が旗下のあつはり勢その勢都合六千餘騎
高田川の端ふ押しせ川を隔て矢軍ふ數日をおくりていまど
墓々き軍もあうりりや爰ふ義長熟々と思ひらるる千葉の
主戦ありて目ふあまる大軍先手をせふ六千餘あり後陳あり
ほちば二万をおくべし我の客戦ありて味方ハ小勢あり自余
の如く軍せむ千ふ一つも勝負あつはりまづ千葉方の大將共
比不和とあるべき反簡を行て同士軍させ其弊ふ乘て兵を出
して勝負をさそべしと思ひあむらく其術を工夫しりるがき
いと考へ出して腹心の家人を潜り小壽林寺へ使はり主人の
病氣平愈の祈禱をたのむ其御禮として貞宗の太刀一腰并小
神馬一足飼料として黄金十五枚を奉納せらるる爰ふ千葉

の惣大将小命せらまへ東六郎の武運長久の祈をたのまんと
壽林寺のいり法印の對面戰場の習ふをハ再會の期一か
くしとまづ酒宴をありりる額殿ははき置る馬を見つ
け立寄て是をさる小黒のぬとき逞まき馬おいて八寸餘
きる名馬あり六郎常馬を愛する直いとくぬ男ふれ
ハ頼りふ是をほくあり誠おむく一宇治川を越一摺墨もい
りでう是を増るべき天晴の駿足うふこの馬に乗戰場お出る
あらが海山も一飛あらん願くく此馬某おたびあつと頼お
是を所望しられバ法印も出家の身故馬の入用あり去あが
他の人あらんふら奉納せし人の思のくもあまが辞退もま
き直あれど君の大檀那といひ殊小國の守あり師身の約もあ
まバ黙止ぐく一所望お任せ進上せんと申されり六郎大お
よろらび觀音の寶前へ米五十俵を奉納し馬を率てぞ帰る

る義長の思ふまふ不斗策ふれりと心ふまづきおそるふ
敵の陳中へ忍びをいき云トめぬ此度壽林寺の吹拳あて
六郎殿の義長の味方とあり近日高田川を打渡一合戦あつ
らあつて裏切まへと淺瀬をも案内しむそらふ契約せられ
れば義長が秘藏せし黒の名馬を六郎殿お参らせたり是の
乱軍の節六郎殿の目印あまるとはことやうお雜説をぞ申
る此殿づけといふあむく一足利の代ふり吉良今川を殿つけ
ると吉良殿今川殿とよび公方たる時吉良より繩べ
吉良絶る時ハ今川よりつぐべしと御證文を下され惣下座ふ
尊敬せしとあり又大閤秀吉公の御時ハ大和納言秀長徳川
大納言家康公を殿付とせり御當代いたりても御三家兩御
殿の類殿つけ惣下座ありされバ其頃千葉の家おてハ此六郎
びを殿つけあり二条大藏鳥居村田是を聞き大おあやし疑ひ
りてされバ六郎殿逆心ありとて評定ふし二条下知して六郎
を招ぎ饗應の歸り路岸山とつ難所伏兵を置鉄炮を以て
討取べしとえりりる六郎是をさどり道を替て戻り

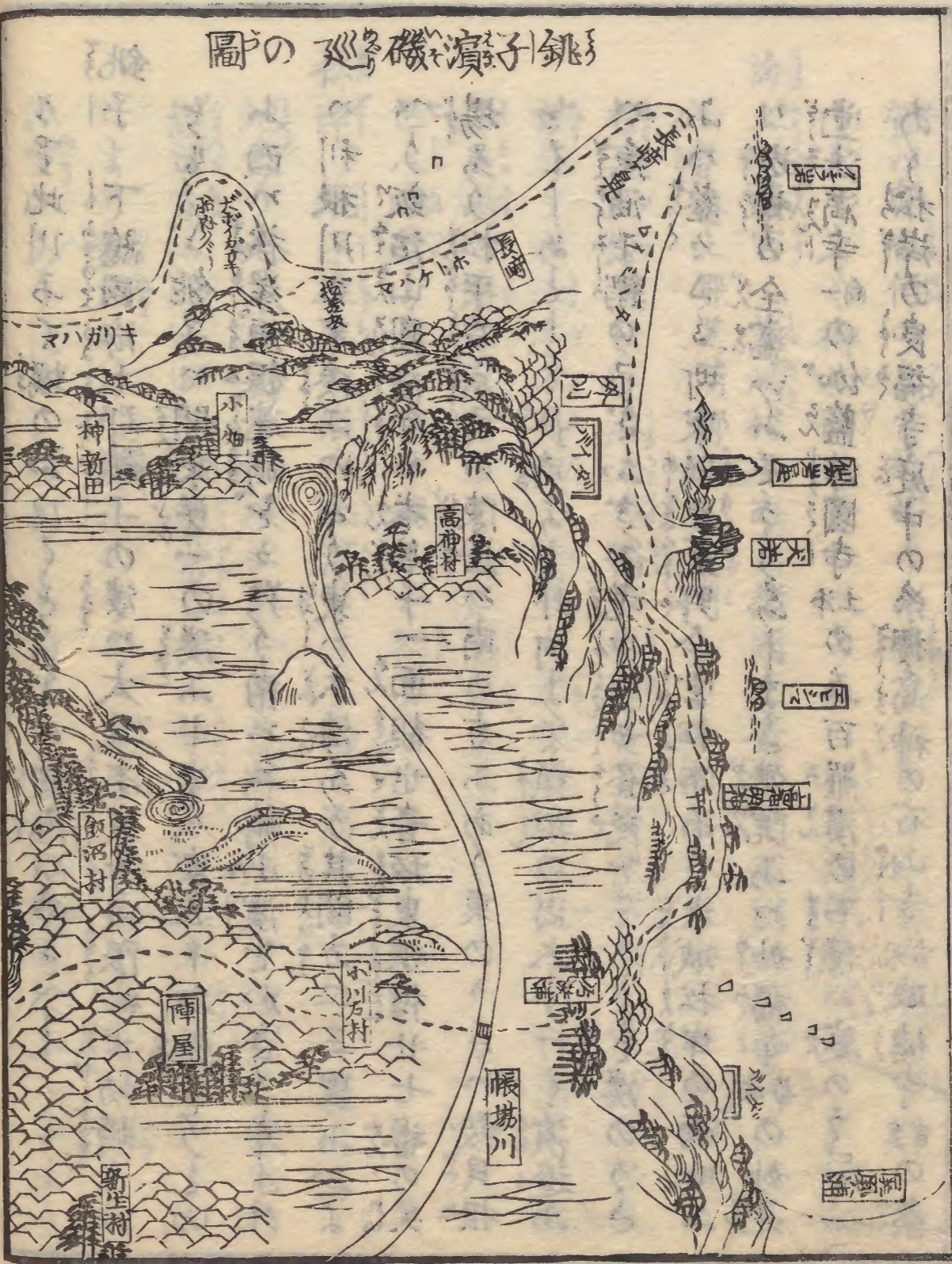
らむむ茶一く是も止らりなり斯て東六郎の大いかり二条
が伏兵も既ふ命もあやうりうりう此度そやくも悟りう其
場をのがれまぐみ陳牙へ押うけて大藏を討ん度安しといひ
ども内乱をおそれおとるふ今大藏二条へ歸りさる上ハ何の
おそるゝ處あらんと逞兵百五十餘騎をささぐひ二条が館
へ押寄我こそん東六郎鎮瀧あり岸山の謝禮を推参せり首を
渡さべいと云もあへむ真一文字小切する大藏も六郎と聞
しうハ今ハのうぬ處と思へをせ出て戦ひしハ河うハ六郎
ふ及ぶべき終ふ切たをささるるを六郎等堤大助をせ寄
て首を取しうべたちまち館ふ火をかけ一遍の煙とそありあ
り東六郎鎮瀧より七代の祖東下野守常緑ハ千葉常胤卿の
宗族御先祖の御分郡として東郷をたぬりりるふより
千葉下野守を改めて初て東の下野守とを号しりるあめ下野守
ハ歌人あり今地下ハ歌道の傳ハ度此人より始る東野州と
いハ是ハ是ハ此高弟を種玉菴宗祇といハ宗祇の傳を三条殿へ
送らハ道遙院稱名院三光院其御子を圓智院公國といハそのめ

御子を三條大納言實條といハ公國の高弟を細川玄吉法印と
いハ古今の傳受を丹後たふべの城あてうハ奉り度その
頃ハ書ふくハ此下野守ハ此度とくく佐倉へ聞しう
東六郎より七世の祖あり此度とくく佐倉へ聞しう
ハ千葉勝胤家臣小命トて次第を正し一老臣原式部が父胤總
入道了月大須賀小隱居して在るるを招ぎよせ評定ふ及なれ
ば了月が日二条大藏ハ敵の斗策おちりり我罪おのれとせ
むる此處也六郎殿ハ一点の不忠ふ一猶又此度高田川の夜
軍小島居村田荒海の三將打死せし由聞及べり又義長今度兵
を出さ度全く千葉を亡ぶべきふしもあるべ唯武威を志め
けの一通りあらん此度ハ御和睦有て然るべし則神大寺和
尚を頼と小見川越前守ハむり一天菴の旗下あて相知れる中
ふもバ小見川を差添義長の陳へ遣しりる義長も尤と約し
まふりち勝胤の姫君十三支あるを岡見傳喜が三男谷田部の
岡見主殿どの、妻と約し傳喜どの、末の御娘を御舎弟大須

賀四郎胤信の妻と約せしめ両家をもとめく人質を取かたり
はくかふく御和睦とのへまれば双方陳をぞ引取り取本意
海上八幡宮 芝崎村にあり諸國圭齋録下總國神社部小三十石
八幡海上郡芝崎郷松本長門とも例祭六月十五日出興あり
右三座ありその海上八幡と松岸の宇賀大権現と本所の妙見
宮あり右三座の御輿一箇年ハ垣根村御假殿まで一箇年ハ鉦
子長崎の濱壘石の上まで是隔年あり
世人此邊よりをべて鉦子と稱ふ
松岸 鉦子往來の旅人此河岸より揚る溜肆有ていと繁昌あり
地あり是より長塚木城松本今宮荒野新生ふとを経て飯沼の
觀世音ふつる一里間總常日記ふ松岸といふ船をてつりふ
こより飯沼かけて岸ふのぞめる家居ども見とをふ時いら
ぬ雪のありはをこるあちまをる皆蟻の目もてふるあり

なり此川あて蟻のおほくとらる、夏思ひやるべし

鉦子 下總國海上郡鉦子の湊ハ大日本東方の限名一犬坊崎と云
そもく、鉦子の関東第一の湊ふし人人家五千ふ餘ありとい
ふ西ハ松岸垣根芝崎をこり南ハ三崎小濱をかぎりとい北
ハ利根川の末湊ふといり東ハ大海あり其間方二三里ふおよ
べり飯沼山圓福寺の本尊十一面觀世音坂東順禮廿七番の灵
場あり松平右京安の陳屋ハ南の方ふあり東のふらハ飯貝根
をそしめとして長崎より外河まで楫船の出入りげく濱邊ふ
ハ魚油干鰯のこぎおきふ老少男女昼夜をこるこを湊のうこ
ふハ整々たる町家新生荒野今宮松本あり本城松岸の両町ふ
ハ遊樓の全盛つふをうりあしまふ佛院ふハ妙福寺華の妙見
堂法満寺向の伽藍淨國寺土淨の五百羅漢の石像ハ庭のうこふ
あり松岸の良福寺庭中の糸櫻高神の石山寺天台威徳寺真の藥



師如来ハ天竺より渡らせり小尊像といえは、東の方へ
り出さる山の上方の和田の不動堂石階の左右に瀧あり、その山
に登れ、後の方の蒼松の黛色濃あり、前ハ東海ふのぞと奇
岩左右に聳へて風色斜あり、濱めくろの人もまづこころ
憩めて時をうらむに勝地あり

飯沼親世音 飯沼山圓福寺十一面觀世音 坂東二 二王門鐘樓垣
本堂の額圓通殿得水書 二重塔龍藏推現 銅石華表あり境内ふ
見世物輕こごゑむ其外茶見世多く至て賑わい

定芝居の今宮の芝町あり 座本 梅本妻太夫
諸國圭齋録下總國新義真言部ふ三十石 海上郡飯沼郷 圓福寺

とこゆともく、てうといへる名の志摩の國に峇志と音か
よひたれを假名も天不志とかくべく詞の心へ出伏まゝの遠
伏ふとれよゝあるべくおぼゆと與清鹿嶋日記ふいへり

寛齋遺藁四 遊銚子感事而作二首

風波千里幾辛艱孤負春光忽自還何計平生如意筆却教今日
恨空閑

東海之東渺々波飛帆礙眼亦無多春雲底事癡頑甚不使我為
觀日歌

去の外五山堂詩話ふ種々の書ふ詩歌等多く見ゆれと畧き
名物 千リメン白魚 鰹の塩辛 鱸 牡蠣

防風 松露 舟の醤油 廣屋むしほ 吉野屋料理
海藻菊蕪 世人飯活あん 味噌汁ふ煮て産婦あとららの藥と云

觀音より西の通の觀音前荒生中町田町荒野橋本町竹町通町
袋町明神町萬町芝町富田屋町通石町今宮目出度町今宮芝町
唐子町夫より大込松本本城長塚松岸ふ達を
まゝ觀音より東の方を飯貝根といふを
芝町入町濱町濱
田中町五藩町和田

町、清水町、橋本町、通町、田場町、植松町、東中町、是あり

清水の井、飯貝根清水町あり、方二間をり、石めてかこもこ

る井也、鉾子第一の清き水あり、水汲人終日群集ふ

和田不動堂、和田の南山の上あり、石坂の左右に瀧あり、風景

至てよ

川口明神、川口の方へさし出たる山の上あり、拜殿、白紙大

明神の額、くもり是より川口を眼下に見おろし、常陸原より

鹿嶋の浦、奥州の浦々、造も見渡さる、鹿嶋日記、ふえもいをぬ磯

べのさま岩れたる、ぎまひよせうへる浪と、あつめたるあ

れさ言をふも、ふんでふも、はくしが、めどが、ふ帆うは島

三一嶋、ふどいづれもめづらさ、ふ目ひらうれぬ、ねきめらと

へ東の海雲、ふつりたて、それれをみをあらび、浪の花へ咲覽

ねをた海に沖お枝、えもみえ、あくにいう、でう浪の花へ咲覽

云傳ふむ、四日市場村、長者あり、其娘を延命姫と云、上富
田屋町の形部と云、もの媒あて、阿部、清明を、駕と、以、姫、顔、か、さ、ち
至て見、ふく、清明、是を、死、か、へ、長者、の家を、遊、いで、小、濱、村、の、海
の端、小、草、履を、ぬき、捨、身を、投、さ、る、躰、あ、る、置、同、村、西、安、寺、の、海
て、忍、び、隠、さ、る、姫、後、を、追、う、け、此、所、不、来、う、の、草、履、を、見、て、大、お、な、げ
き、我、も、と、も、思、ひ、定、め、海、へ、飛、入、り、底、の、み、く、む、と、成、お、さ、り
斯、て、姫、の、尸、川、口、に、流、れ、来、り、を、所、の、者、共、引、あ、け、て、菖、と、擲、と
を、納、め、祭、り、故、小、菖、櫛、大、明、神、と、い、え、り、を、い、は、の、頃、ふ、り
白、紙、の、字、あ、あ、や、ま、れ、り、と、云、此、神、も、と、よ、り、顔、形、の、さ、ふ、く、さ、を
う、と、あ、る、故、あ、や、ま、れ、り、と、云、此、神、も、と、よ、り、顔、形、の、さ、ふ、く、さ、を
の、人、擲、を、奉、う、て、祈、誓、さ、れ、バ、驗、あ、り、或、ハ、顔、の、で、き、も、此、あ、さ、あ
と、有、人、ハ、紅、粉、お、ろ、い、を、奉、り、て、祈、る、小、神、妙、不、思、義、の、靈、驗、あ
り、と、ぞ、又、鉾、子、濱、長、く、不、獵、の、亥、あ、ま、川、口、明、神、を、い、さ、祭、の
さ、め、小、濱、村、西、安、寺、の、祭、り、あ、る、清、明、の、神、よ、り、幣、を、乞、来、り、て、川
口、明、神、へ、奉、を、バ、奇、妙、小
大、獵、と、成、と、い、え、り

千人塚、川口ありむう、獵師の海中に溺死し、あるを藪り

塚也と云、石像の地藏尊、建り、毎年七月、鉾子中の寺々、其日く

の定めありて、此塚の上、あて、施餓鬼あり、何人の詠ふや

うとかさ、これえ、あ、あ、む、あ、て、今、ふ、泪、ご、の、伝、也、れ

ぬる塚ま、と、獵、船、の、風、あ、く、く、て、帰、り、お、そ、き、時、ハ、此、塚、の、う、へ

鉾子

三十三

ふて火を焚川口を目印とさる由ふて頂ふ火を焚跡あり此
塚の側ふ鉄炮の臺場あり世人川口の御臺場と云

川口 則ち鉾子口あり岸ふ添て一の岩二の岩とつめて大
る岩二箇所あり其間凡五六十間許此岩より常陸の羽崎迄ハ

程遠けきと海浅くして船通せ依て此岩の間を出入を至て
難所ありといふ大荒浪の岩あつて打くらげさぬいと

おそろー

是より南の方へ磯つゞきお行を濱めぐりと云名所多し

目戸が鼻 東海第一の出さきあり川口より此所までを平磯と

いふ色々の名貝小石多し帆うけ石ハ海中ふたてり七月廿六

日の夜鉾子中の老若男女此所ふ出て月待せ群集大方多し
葦鹿嶋 めどが鼻より此所までを黒ハへ濱といふ黒石多しあ

しう嶋ハ岸より四五町許をあられて小嶋ふとつあり年中あり

此嶋ふあがる夏二三十或ハ八九十多き時ハ二三百疋おも

及ぶ波打きこふひとつの岳あり是ふ登りて望するお救百の

あしうかさあり合上ふあり下ふありらるい遊ふさぬ大の子

の乳を争が如し其鳴声白鳥のふくが如く遠く追聞へてさハ

がー中ふ大海瀬一疋高き所ふ登り四方を見廻し一番をさる若

船近する時ハ鳴て群を驚うし悉く水中ハ飛入る是をあしう

出の番いつふても居らぬ夏あし鳥銃を以て打搦るの番といふ大き八九

尺を大とき海中を行時ハ半身を水上ハはらつて立て潮を飛

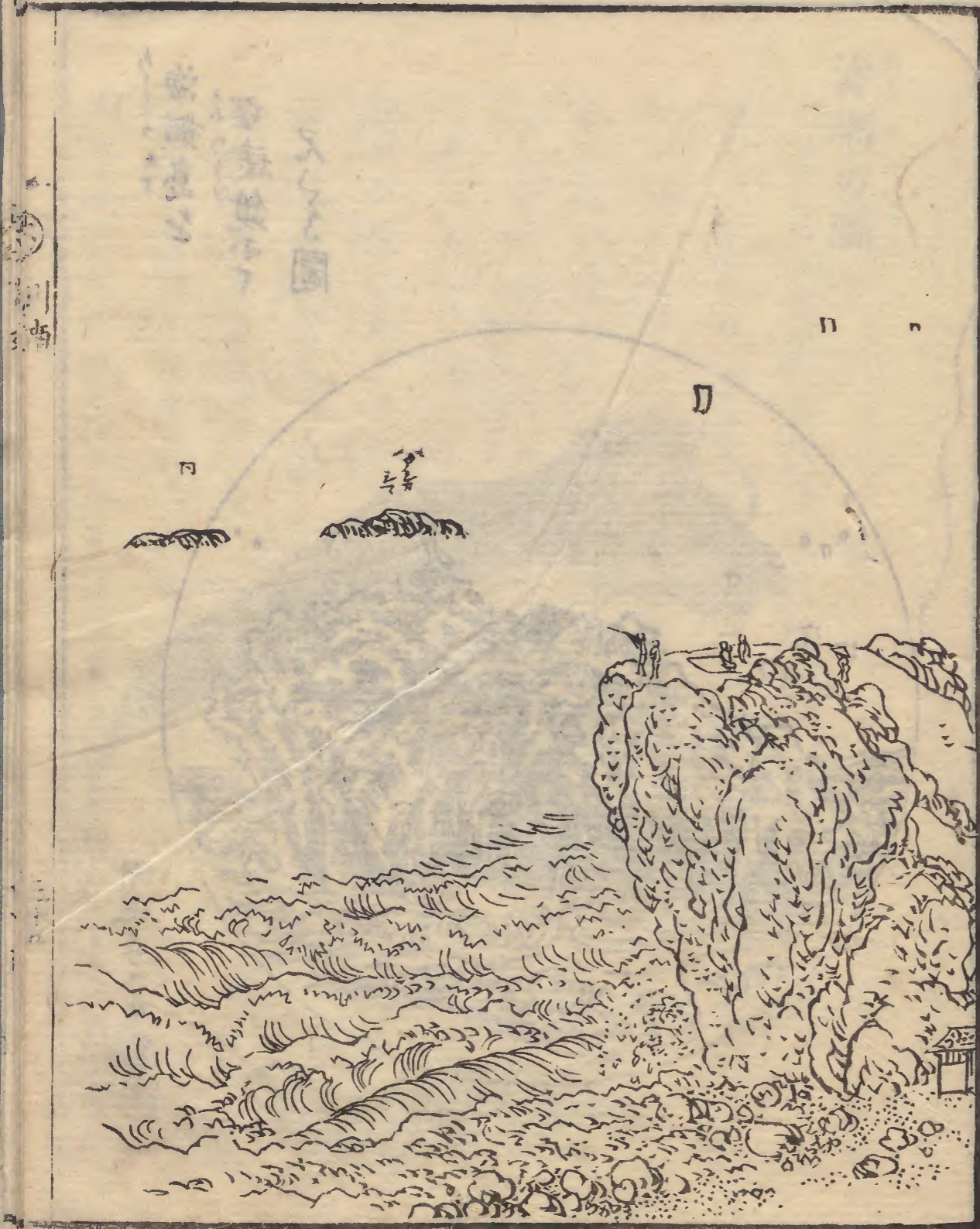
し行く甚畏るべき状あり按ふ紀州日高郡衣奈庄大引浦より

地方を離ること四町許ふして周圍百四十間餘の小嶋あり毎

年秋の土用前後ハ海瀬此嶋ふ来りて春の土用前後ハ何

きふり帰る云小ふるものハ長さ五六尺大ふるものハ一丈二

三尺ふ至と挑洞遺筆ふ見えとせと鉾子のあしうハ年中居り



銚子浦濱巡
 海濱嶋
 眺望
 の圖

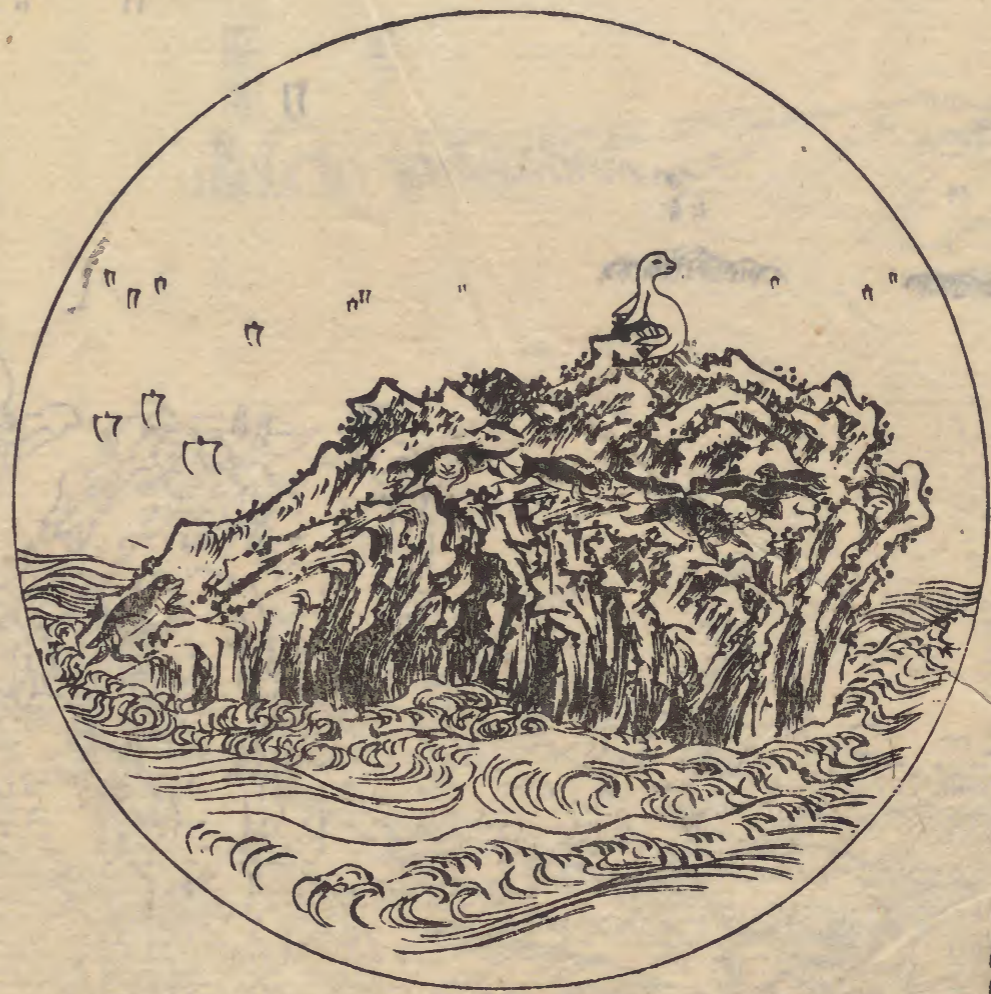
石印の鼻

鹿ノ島

きりかみ

素真

海獺島を
望遠鏡とらめうしにて
見しるみるる圖



湖城こじょう一宿いっしゆく 書

海獺あひのの圖づ



大ききもまゝ八九尺ふ過きさきと形状の同トさまあり頭小く
口尖り歯牙大の歯牙ふ似くり目の大ふして耳至て小さく吻
鬚粗く長し全身短毛あり常の品の其毛茶褐色ありまゝ白色
黒白雑色蒼黒色も有り左右の扁鬚爪ありて末ふ岐あり尾ハ
獸尾の如くふして至て小さく尾を攪きて又兩鬚あり是ふハ
爪五ツ有りて末ハ分きて指の如し奥州津輕ふて此鬚をテツ
ピといふ又臘脚獸のヒレも鉄毗と名け皮ハ禱とあり或ハ馬
臭ふ用ひ或ハ荷包ふ製を肉ハ剛くして味佳あらば本草ふ主
治を缺く東鑿寶鑑ふ曰味鹹無毒主人食魚中毒魚骨傷人及喉
鯁不下者又時珍食物本草ふ曰味鹹甘平無毒食之消腫及癰瘡
邪氣結核骨燒灰服治鼓脹腫滿まゝ脂ハ金瘡ふ傳て良云一説
ふ海獺の大なるものを蝦夷ふてトといふ又紀州の阿志加
ハ海獺あるべしといえりニチとトハハ同物あり海獺と海

驢ハ同類ふして別物あり形ハ海獺より大ふして體ハ瘦せ其
毛淡茶色ふして左右の鰭ハ海獺より短しこれをもて異と
そ此外ハ海豹獵虎臘脚獸その外海獺ハ類ハ海獸甚だ多し云
諺ハ小鰭の大なるハトといふあると世人ハよく云々あり先
年銚子の濱近き所ふてトの死しあるを拾ひ一人あり是ハ
トハ天上せんとして途中より落くるもの也と土人云あひり
其形尋常の鰭より大あれども別ハ替る夏ふくたハ鱗の間よ
り大きき毛多く生出し頭より尾の方段々と毛長く尾ふ至てハ
長さ二三寸ふも至きりとそ此外ふも如此トを見くるもの
折々ありといえり是もトといふものや
按るハ海獺の大なるをトと云といハ古の海獺も天上ま
るものに見えり想山著聞奇集ハ畧豊後國佐伯侯の藩士間
某七郎右衛門と云て側用人砲術を好で江戸表火術の師家淺
手方勤る人のよし

銚子

羽某の門人也天保五年甲午九月山嶽をせんとして一兩輩と共
小六又玉の鉄炮を携へ佐伯の城下より一里半程有る海岸
雲止山と云ふ遊びりる小海上俄に黒雲を生じ烈風海水を巻
あげ暴雨車軸を流し山海鳴動して物凄く遊士も側ある堂
入て海上を眺む小何となくあらむ海中より雲より降り昇天
る有さぬめて雲間小火焰ひらめき真一文字ふまゝを差
鳴り来る間氏の勇猛の人ある故直に鉄炮を構へ矢比を待
彼煽々たる火焰を目當大空を打つ小手ごころもあけま
打そんトとる夏と心得其内小雲も吹拂ひ晴天と成る由
さして心ふも留む其日の帰宅ありと語りて夫より三日
め小同國北浦と云所の獵師何とも知をぬ大なる海獣の汝
つきて海濱小漂差せし由代官所へ訴へり故城下より目
付役を初め役人あまゝと相越段々様子を窺ひ見ら小老海獺と

見えて惣身短き毛あつて色ハ茶色あて背通りハ黒く濃く腹
ハ薄茶色ふて鱗大きき惣長さ七間三尺横巾九尺許有て實
老ぐらゝき海獺あり役人逐一吟味しれども惣身ハ聊々の
疵もあつたが左の目小穴ありさぐり見れば六又の鉄玉出
りまは正しく間氏の打たるありと此道具さ小主君の聴き達
しりまは打つるもの手柄ありとて則間氏へ下されしと也
依て城下へ引取り皮を剥肉を切背骨の思ひより細く
外小骨もあつ惣身肉の多く白色ふして油多く味鯨より
美し此肉勞症の薬もて一度食へば子孫に至る迄其病ふしと
て一家中の申ふ及ばる遠方のもので間氏へ食ふ来り或は
貫ひて行も多く悉く施し盡したりと也さて其皮を泥障と
して弟一を君彦へ献じ弟二を國老へ贈り弟三を江戸へ持来
りて師匠の浅羽氏へ贈り其餘をべて泥障十八懸とありしを

同僚の人々も分ち與へると也まべて海濱ふてハ魚龍の昇天
 する夏折々有ものありと云 右師家の浅羽氏の主馬政徳と云
 居の人あり諸國も門人も 御先手と力めて江戸牛込に住
 多くありて名高き人あり

カン石 海瀬嶋の邊海底より出る黒石めて里人カン石と唱ふ

石質石炭の類ふて至て上品あり黒色光澤漆のおと予
 を藏を高さ七寸

方五寸そりり何

アまの獵師の綱

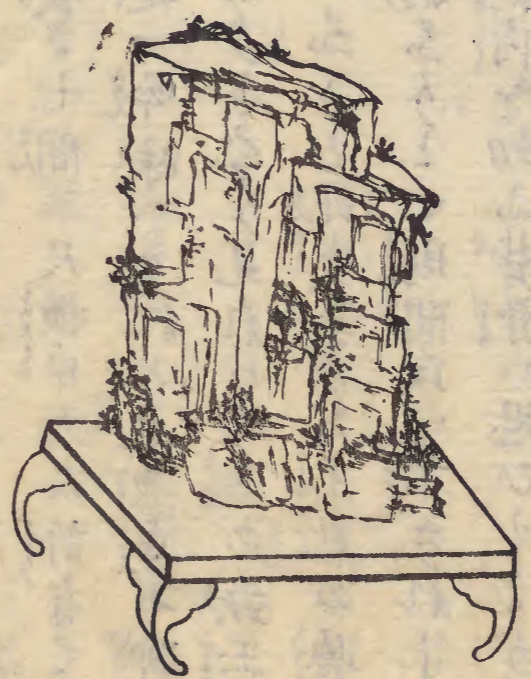
みかきりて海底

より出るものあ

り故ふ大なるハ

あーと云 大抵ニ

大と云如此大なるハ多
 と也里人大小殊とを



大吠崎 海上砥荒砥是より出る 故ふり石切の鼻とも云此所ハ

胎内くゞりといハ岩窟ありて浪うち涯へ通りぬけ岩山へとい

登る甚ど難所ありあー嶋より此所までを霧が濱といハ大

浪の打寄る磯輪ふまバ浪志ぶき飛散て常ハ霧の暗さるが如

一砥石山より地藏坂を下りて佛濱を通り長崎ふいさる

長崎が鼻 東西の隈り西の長崎ふ對しての名ありと云此所ハ

獵場ふて漁家あまそ建あらびはくろえぬ岩木を庭の姿と

大なる岩のおもろき形してあさりの小嶋ハ岸うつ浪ふを

がこをかき風景言葉ふはく難ハ是より置磯と云ふ出づ

黒き岩壘を志はくろが如く沖の方ふハ鯨岩といふがあり海

上ハ鯨の浮び出さるがおとこを過て外川ふ至る

外川の濱 此所むろハ家数千軒有ハ獵場あるを今より七八

十年前津浪ふて家を流され亡失しとろ志が今ハ家数

銚子浦
大若嶋
千騎岩
之圖



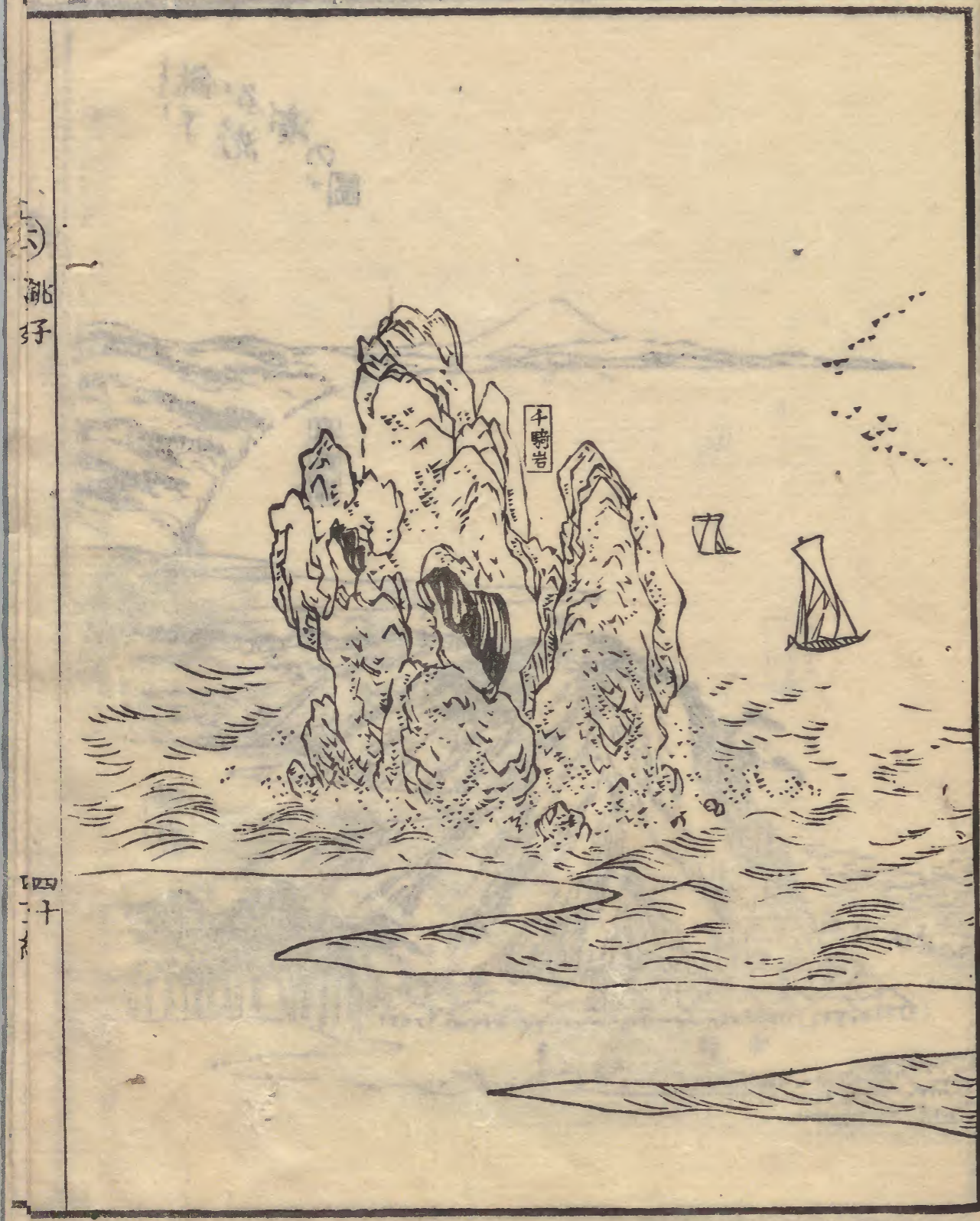
天若

素真

〇 〇

銚子

四十



六 濱廻り



四十一

銚子
の
濱
洗
石
の
圖



素
真

多く出来て大獵場とあまう南の方ふ海へ向ひて鉄炮の臺場
あり是を外川の
御臺場と云

里人の云くより五六里許西の方ふ東の庄といふ村あり三
十三が村の鎮守ふして應神權現を祭まり祭禮ハ廿一年めの
四月八日外川の墨岩の上ふ神輿御濱下り有り見物の老若群
集夥一云傳むろ一外川の宮三夫と云もの老母との濱邊ふ
てうつろ船みて流されたる赤子を拾ひ老母の急もどふてと
り揚來り養育せしとありいづる故ふてう此子を後ふ應神
権現と祭りしとぞ其例ふよりて祭り毎ふ歸輿の節今ふあ
の宮三夫の家ふ立寄御小休あり其時此家の老母神酒ふとを奉
てて饗應一志をらくして老母ふるき箱より急もどを取り
御輿の上ふかぶせてゆり動ろ一あからサおうおんどのをた
ちやましくといふ夫より御輿を上て歸輿ふ及ぶとあん

仙ガ岩屋

外川より南の方岸より一丁許離れて海中ふたてり
周圍二百間許り高さ四五丈も有べし汐干たる時の歩ふて渡
らるされど常ふ天狗住より云る故渡る者稀あり予ハ其夏
を知らばして渡り岩屋ふ入り嶋の半覆ふ岩屋あり是より
入てまると一丈餘も下る中の廣くして横豎二三丈も何とべし
沖の方へぬけ穴あり此所ハ大浪打かくりて物凌ましく出る
夏あり難し又中程より左の方へぬけ穴あり是をゆけを高さ所
へ出る岩角ふ取はき辛くて頂ふ登るふ海中の嶋山四方より
大浪の打くるふ山も崩るゝうと思われ身の戦慄して目開
りきぬ程あり此山黒石ふて岩角あらく足いゝて容易ハ一
歩ふ進まえがさき山あり

大若 仙ガ岩の南ふあり岸より續きたる一ツの嶋あり魚とる者
の長ありして頂ふたゞ下棟清くめづらうあるさまふ作あり

住寂たる別世畧誠ふ墓の世比外とおもはる是より磯たの
山を越して名洗ふいづる

名洗浦 南面海に向ひたる獵場あり左の方の高神明神の山續
き外川の方あり右の山上に鉄炮の臺場あり此山はさき西南
の方へ二里許海中に差いで浪打ぎわの巖壁の如く此の所を
巖風が浦といふ富士の高峯適う不見へ渡り向の出先の長井
と云所あるより夫より飯岡浦九十九里濱より上總安房の浦
々へ續く銚子磯免ぐりといえる此所にて終る



利根川圖志卷之六終

嘉永五年壬子新刻

大坂

心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛
同 博勞町 河内屋茂兵衛
同 筋本町角 河内屋藤兵衛

江戸

日本橋通二丁目 須原屋茂兵衛
同 二丁目 山城屋佐兵衛
同 芝神明前 小田屋新兵衛
本石町十軒店 岡田屋嘉七
大傳馬町二丁目 英子屋大助
横山町三丁目 丁子屋平兵衛
浅草茅町二丁目 和泉屋金右衛門
筋違御門外藤籠町丁目 須原屋伊八
紙屋徳八

